



2026年 7月 第786号

教会だより

カトリック甲府教会 月報

〒400-0032 山梨県甲府市中央2-7-10
Tel / Fax 055-237-2531 <http://catholic-kofu.com>
編集・発行 カトリック甲府教会 広報委員会

きょうこう 14 せい かいちよく こうふ さい
 教皇レオ十四世、2026 年 5 月 25 日、回勅『マニフィカ・ウマニタス』公布に際して
 のあいさつ

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

皆様が今日ここにおいでくださったこと、また皆様の関心に対して感謝申し上げたいと思います。今日のこの集会を準備して下さったかたがた、とくにわたしたちが耳にしたさまざまな考察においてその専門知識と経験を分かち合ってくださいましたかたがたに心から御礼申し上げます。

オラー氏がわたしたちの招待をお受けくださったことに特別に感謝いたします。わたしも教会を代表して、人工知能の時代に、ともに歩み、耳を傾け、語り、人類のために道を見いだすようにというオラー氏の招きを受け入れます。

違いがあっても互いに耳を傾けることができることは、なんと大きな希望のしるしであることでしょうか。今日の意見交換は、この瞬間の重大性とともに、わたしたちがともに現代の主要な諸問題と人類の未来を識別することができるという確信をも示してくれます。

歴史の重要な時に、教会は、福音の光と人間の尊厳に照らして「新しいことから」を解き明かすように招かれます。135 年前、わたしの敬愛すべき前任者であるレオ十三世は、故郷から引き離された工場労働者とその家族の状況と、急速な産業の変革によって生まれた新たな形の貧困を目の当たりにしました。教皇は、教会が傍観者でい続けてはならないことを理解しました。人間の尊厳を脅かす時代の転換点に、回勅『レールム・ノヴァールム』は、進行中の「新しいことから」に関して福音的かつ社会的なメッセージを表明しました。

今日、わたしたちは同じように大きな、そしておそらくさらに大きな帰結をもたらさうる変革に直面しています。人工知能 (AI) はすでにわたしたちの生活の多くの領域にかかわっ



Leo PP. XIV

ており、人間の共存を形づくる決定に影響を及ぼしています。それは戦争の遂行方法にも劇的な変化をもたらしています。

先の「レオ」と同様に、わたしも、信仰の目と、理性の明晰さと、神秘への開きと、自らの心に響く貧しい人と大地の叫びをもって、もう一つの巨大な変革に目を向ける使命をゆだねられているのを感じます。

『マニフィカ・ウマニタス』は、レオ十三世がしたのと同じように、耳を傾けることから生まれました。わたしは、大きな苦しみを和らげることができる技術に真摯な情熱をもって取り組む科学者や技術者、公正なルールを忍耐強く追及してきた政治指導者と公務員、若い世代の未来に深い関心を抱く両親と教師たちの声に耳を傾けました。

人間が効果的に統御することが事実上不可能な、自律化の進む兵器システムに関して、他のきわめて憂慮すべき声も届きました。偏見と不正によって汚染されたデータに基づいてヘルスケア、雇用、安全保障の利用を阻害するアルゴリズムに関する、きわめて憂慮すべき報告も耳にしています。新たな形の排除と苦しみを生み出す可能性のある決定がなされる際に声を上げることができない人々の沈黙についても聞いています。

このような傾聴から、『マニフィカ・ウマニタス』で表明された、人を驚かせる確信が成長しました。すなわち、人工知能の武装解除を行う必要があるということです。たしかにこのことばは強いものですが、慎重に選ばれたものです。なぜなら、今この時、注意を引きつけ、良心を呼び覚まし、人類のためにこれからの道を示すことのできることを必要とされるからです。

教会は長年にわたり核軍縮に取り組んできました。あらゆる強力な技術力は人々の生活に影響を及ぼし、そのため適切な道徳的識別と公的な制御が伴わなければならないと自覚するからです。核軍縮は、平和と人類家族の尊厳への奉仕であり続けます。

同様の意味で、人工知能は今や「武装解除」を、すなわち、それを支配と排除と死の道具にしてしまう論理から自由にされることを必要としています。人工知能は、原子力と同様に、すべての人、また共通善に奉仕しなければなりません。技術に関する決定は、良心と責任から決して切り離されてはなりません。使徒パウロはこう勧告します。「ほかの人々のように眠っていないで、目を覚ましていましょう」（一テサ 5・6）。今日、このような警戒が必要とされています。平和は、単に戦争がないことではなく、正義がなされている状態です。しかし、技術が批判的感覚を弱めるなら、平和そのものが危機に瀕することになります。

しかしながら、武装解除だけでは十分ではありません。わたしたちは建設しなければなりません。

「建設する」ということばは、わたしがペルーで宣教者として過ごした時代を思い起こさせてくれます。2017 年、ペルー北部を豪雨と洪水が襲い、多くの家族は住む家を泥流に流され、多くの道路も同様でした。その時わたしは、再建とは、単に破壊されたものを代替することではないことを学びました。それはきずなを修復し、信頼を回復し、未来への希望を再び呼び覚ますことなのです。さらに、だれも一人では再建を行うことはできません。

わたしは『マニフィカ・ウマニタス』の中で、聖書の預言者ネヘミヤを思い起こします。ネヘミヤはエルサレムの荒廃した壁の前で、失望した民を、再建を行うために集めます。壁というイメージは、閉塞や分断を正当化するのではなく、一人ひとりの人、またすべての人が自分の役割を果たすように招きます。煉瓦を一つずつ積み上げることによって、すべての人の尊厳を守ることができる、より公正な共存が形づくられます。ネヘミヤの努力は現代にも語りかけます。人工知能は、交わりの地平の中で歴史の建設現場となることができます。

この交わりの地平の中で、技術の進歩は人間の生活に奉仕することを学ぶのです。

聖パウロはこう警告します。「おのおの、どのように建てるかに注意すべきです」（一コリ 3・10）。パウロは建設現場を恐れているわけではありません。むしろ、堅固な土台なしに建てないように警告しているのです。人工知能を恐れてはなりません。むしろ、人間が果たすべき役割をつねに考慮すべきです。わたしたちは、自らの最強の技術的な手段について注意を怠ることがあってはならないのです。

教皇聖パウロ六世は、真の発展はつねに「一人ひとりの人、また人間全体」にかかわると述べています。「一人ひとりの人」とは、だれもデジタルな変革の周縁に取り残されてはならないことを意味します。「人間全体」とは、だれも生産性や認知能力や単なるデータに還元されてはならないことを意味します。人格は、いかなる機械も代替したり疎外することのできない、自由と、内面性と、愛と礼拝への招きを自らのうちにもっています。

このような総合的な観点のもとに初めて、人工知能を共通善へと方向づけることが可能です。システムを設計する人とその影響を受ける人、富裕国と貧困国、組織と個人、権力の中心と周縁——これらが一緒になって初めてわたしたちは、少数の特権的な人のためではなく、人類家族全体のために未来を築くことが可能になります。

これが、教皇聖パウロ六世が語り、教皇聖ヨハネ・パウロ二世がともに追求すべき地平として力強く宣言した、愛の文明です。それはナイーブな夢ではなく、目指すべき目的です。それが、イエス・キリストが歴史の中に開く道なのです。

そのため教会は、謙遜に、また率直に、人工知能に関する議論に加わることを望みます。わたしたちは技術的な回答を持ち合わせているのでもなければ、専門的知識をもつ人々にとって代わろうとするのでもありません。むしろわたしたちは、現代が切実に必要としている人間に関する知恵をもたらします。すなわち、すべての人格はかけがえがなく、他と代替できず、神を追求し、互いに仕え合い、ともに暮らす家を大切にすることができる、良心を備えた自由で知的な主体だということです。

それゆえわたしは、教会と人類家族のすべての成員に呼びかけます。互いに耳を傾けることを学び、勇気をもって現在の課題に立ち向かい、より人間的で兄弟愛に満ちた社会を築くために協力し合おうではありませんか。

『マニフィカ・ウマニタス』の公布によって、いつも目を覚まして、「希望の職人」として現代の建設現場を築き続けるという決意を心に刻んでください。復活した主イエスの霊がわたしたちの共同の働きを支えてくださいますように。

皆様の一人ひとりを聖母マリアにゆだねます。「マリアの賛歌（マニフィカト）」は、身分の低い者を高く上げる神の偉大さを賛美します。愛と奉仕のうちにすべての人の真の偉大さを認めることをマリアがわたしたちに教えてくださいますように。主が今日わたしたちがその恵みにゆだねる大いなる計画に実を結ばせ、歴史の中で愛の文明を成長させてくださいますように。

皆様すべての上に神の祝福を心から祈り求めます。（祝福）

本当にありがとうございます

（カトリック中央協議会Hpより）



おしらせ



1 きょうかいいいんかい 教会委員会

7 月 19 日（日）11：45～ サンタルチア講堂にて教会委員会が行われます。
※当日参加できない場合は、代理の方に出席をお願いしてください。

2 きてん 帰天のおしらせ

ヨゼフ 若谷 昭夫（わかたに あきお）さん（83歳）が、6月21日（金）に帰天されました。ヨゼフ 若谷さんの在りし日を忍び、永遠の安息をお祈り致しましょう。

3 ぼちかんりいいんかい 墓地管理委員会

墓地の共同清掃について 作業開始時間は、夏の時期に猛暑が続くため体調を考えて、午前中の 7 時 30 分からになります。朝とはいえ暑くなると思われますので、参加は体調をみて無理をしないようお願いします。天候により延期の可能性もあります。

・7 月 25 日（土）7：30～9：30 ぐらいの予定 ＊雨天の場合 8 月 1 日（土同時刻）
問い合わせ 木村 090-8031-9608 宮澤 090-1808-9718

かくいいんかい について 各委員会の日程

じょせいかい
女性会

お休み

かい
きずなの会

7 月 12 日（水） 10：00 ～ センターホール

てんれいいんかい
典礼委員会

7 月 18 日（土） 9：30 ～ センターホール

ちいきふくしいんかい
地域福祉委員会

7 月 19 日（日） 11：45 ～ サンタルチア講堂

こうほういいんかい
広報委員会

7 月 26 日（日） 9：45 ～ センター事務所

ふくしゃ きべしさい しょうかい 福者ペトロ岐部司祭の生涯

1587 年に生まれたペトロ岐部は、迫害下の日本の教会と信仰する同胞を救いたいという強い愛に突き動かされ、激動の生涯を送りました。1614 年にマカオへ追放され司祭への道が閉ざされかけると、信仰への熱い思いから出奔。言葉も文化も異なる未知の砂漠を単身で横断する決死の旅を経て、1620 年にローマに到達し念願の司祭に叙階されました。その後、鎖国によって航路が閉ざされた困難な状況下でも諦めず、1630 年に薩摩への密入国を果たします。帰国後は長崎や東北に潜伏し、棄教した仲間を命懸けで励ますなど、文字通り自分を捧げて活動しました。最後は宿主に害が及ばぬよう仙台で自ら捕らえられ、江戸での激しい拷問の末に殉教。当時の奉行の記録には「キベヘイトロはコロび申さず候（決して信仰を捨てなかった）」と、その不屈の姿勢が書き残されています。
（カトリック中央協議会 Hp より）

ふくしゃ き ベ じゅんきょうしゃ と つ ねが れつせい もと いのり
 福者ペトロ岐部と 187 殉 教 者 の取り次ぎを願い、その列聖を求める 祈 り

いつくしみ^{ふか}深い^{ちち}父よ、

ふくしゃ き ベ じゅんきょうしゃ ふつかつ やくそく あい きぼう お
 福者ペトロ岐部と 187 殉 教 者 は、復活のいのちを約束してくださるあなたの愛に希望を置
 き、^{みづか}自^{じゅう}ら^じキリストの十^じ字^か架^なを担^しい、その死^しを身^みに帯^おびる生^いき方^{かた}を選^{えら}びまし
 た。

じゅんきょうしゃ と つ いの げんだい い こんなん
 殉 教 者 の取り次ぎによって祈ります。現代に生きるわたしたちが、どのような困難なとき
 にも^{せいれい}聖^{たす}霊^{しん}の助^{らい}けに信^し頼^{たが}し、キリストに 従^しい、あなたへの道^{みち}をひたすら歩^{あゆ}むことができます
 ように。

じゅんきょうしゃ せ かい い ひと きぼう き ベ
 また 殉 教 者 のあかしが、世界に生きるすべての人の希望となるよう、ペトロ岐部と 187
 じゅんきょうしゃ いちにち はや せいじん れつ くわ
 殉 教 者 を、一日も早く聖人の列に加えてください。

わたしたちの主^{しゅ}イエス・キリストによって。アーメン。

(2008 年 6 月 5 日日本カトリック司教協議会認可)

福者ペトロ岐部と 187 殉教者（7 月 1 日）

ペトロ岐部と 187 殉教者は、1603 年から 1639 年にかけて殉教した日本人である。日本各地を代表しており、社会的立場も司祭、武士、商人、家族、女性、障がいのある人、子どもと多岐にわたっている。188 人のうち、司祭が 4 人、修道者 1 人、他の 183 人は信徒であり、徳川幕府時代の厳しい迫害にもかかわらず、いのちをささげることによって信仰を証した。

地域別にみて、人数が多いのは京都のヨハネ橋本太兵衛をはじめとする 52 名と、米沢のルイス甘糟右衛門ら 53 名である。

また、生月の西一家、京都の橋本一家、加賀山・小笠原一族、島原の内堀一家は、家族が信仰のきずなで結ばれ、励まし合い、支えあって殉教していった。

188 名の中で代表的な人物は、イエズス会の司祭、ペトロ岐部である。1587 年、豊後に生まれた彼は、有馬にあるイエズス会のセミナリオに入ったが、1614 年、禁教令によってマカオへ追放された。マカオでの養成が困難であったためローマへ出発し、そこで司祭となったが、帰路についたとき日本では迫害の嵐が吹き荒れていた。1639 年、彼は江戸で逆さつるしの刑に処せられ、殉教した。

(聖パウロ女子修道会 Hp より)



今月の教会カレンダー（典礼暦・外国語ミサ・行事等）



7月 3日（金）	はつきん 初金	9：30	ミサ
7月 5日（日）	ねんかんだい しゅじつ 年間第14主日	10：30 14：00	ミサ えいご 英語ミサ（English）
7月12日（日）	ねんかんだい しゅじつ 年間第15主日	10：30	ミサ
7月19日（日）	ねんかんだい しゅじつ 年間第16主日	10：30 11：45 12：30	ミサ きょうかい いんかい 教会委員会 かんこくご 韓国語ミサ（한국어）
7月26日（日）	ねんかんだい しゅじつ 年間第17主日	10：30 16：00	ミサ ベトナム語ミサ（tiếng Việt）
8月 2日（日）	ねんかんだい しゅじつ 年間第18主日	10：30 14：00	ミサ えいご 英語ミサ（English）
8月 7日（金）	はつきん 初金	休み	

聖トマス使徒 祝日 7月3日（金）



イエスの弟子であるトマは、「ディディモ」（双子の意）とも呼ばれている。トマは、イエスが復活して現われたと聞いたとき、イエスの傷痕に自分で指を入れてみるまでは決して信じないと言った。そのため、「疑い深いトマ」として知られている。しかし、イエスが再び使徒たちに現われて彼もそこに居合わせたとき、「わたしの主よ、わたしの神よ」と自らの疑い深さに気づき、イエスからも「見ないで信じる者は幸いである」と諭された。

その後、トマはインドに宣教に行き、マイラポールで殉教したと伝えられている。インドの信者たちは自分たちを「聖トマのキリスト信者」と呼ぶことが多いそうである。

（聖パウロ女子修道会Hpより）